

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「いかに」から「なぜ」へ：今、言葉の教育を問う（1988年）
Author(s)	牧戸, 章
Citation	国語教育思想研究 , 28 : 29 - 30
Issue Date	2022-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053357">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053357</a>
Right	
Relation	



### 一、ことばの力の本質を

純文学雑誌の衰微は、いわれだして(1960年代後半)から久しいが、現在、月刊文芸一般誌は一万部以下しか売れないそうである。しかし、月刊専門ビデオマガジンはそれぞれが三万本を完売し、さらに月間総合ビデオマガジンが五万部でスタートした。

(書き)ことばの文化の中心としての活字文化が、文学・思想に偏重していたことを考慮しても、ことばのみを媒介とする文化は明らかに後退している。

一方、映像を中心とする文化の比重は激増している。メディアとしてのビデオの発明は、グーテンベルクの活字印刷術発明に匹敵するとまで言われている。

しかし、ことばの文化が衰退したのではない。映像を中心とする文化の中であって、ことばもその重要な位置を占めていることには、かわりないからである。活字文化を映像文化と対峙するものとして捉えてはいけない。このような文化状況にあっても、否、このような文化状況にあるからこそ、そこでのことばの役割を明確にしていく必要がある。ことばの教育にかかわる者は、ことばの力を盲目的に前提とするのではなく、ことばの力の本質を求め、それにかなった指導を組織していかなくてはならない。

### 二、対話にこそ

大江健三郎(注1)は、ことばの優れた点はイメージ化を促すことにあるとする意見を否定し、一週間に一千ページを読むような本の読み方は本来の姿ではないとして、

本を読む場合は、ある1ページに20分でも集中してピンのように突き刺さることが必要なわけです。流れるばかりではなくて縦に突き刺さることが。

と述べ、次のように「ことばの力の本質」を「対

話」として捉えている。

物を読む場合でも、読んでいるものと自分の間に対話が行われるとき、横に進行していくのに対して、縦の動きが出る。対話が重なって、縦の構造を作って進行していくようにすることが、本を読む力、あるいは映像を読む力を作ると思うんですね。

その点で、私は対話というものは書く文化、書かれた文化のいちばん中心にあると思っています。

また汐見稔幸(注2)も、

ことばの活動というものには、どんなときにも他者を必要としている。たとえ自問自答しているときでも、内なる他者と対話している。だからことばの力というのは、他者との出会いの中で、他者を介して自他の偏見をはぎ合う力だと言ってよく、より真なるものを志向する強じんな精神と、真理の前に謙虚になろうとする誠実な心性をきたえるのが、ことばの教育の本当の目標なのである。

として、ことばの教育の本質的目標を「外的・内的な対話能力の育成」においている。そして、そのための「ことばの学習共同体づくり」を強調している。

### 三、授業実践の事実から

例えば作文については、『小学生の言語能力の発達』(国立国語研究所 一九六四)をはじめ、多くの調査で、小学校低学年から高学年にいたっても段落意識をもって文章表現をすることは難しいとされる。それでは、どの段階で段落意識のようなものを指導すればよいのだろうか。高学年でも難しいのだから、低学年の頃から計画的に積み上げていくべきか。いや、それはある内面の働き(思考力)の発達を待たないと手だてをこうしても無理な事なのか。それで

はその内面の働きを育てることのためにことばの指導は無力なのか。力を持ちうるのならば、それほどのような内実を持った指導なのか。

一連の問いは、作文の領域に限らず、ことばの発達=ことばの指導の全体にかつ本質にかかわる課題である。

では、これらに答えていくための理論はあるのだろうか。それは、「対話」が意識的に形成される授業実践の事実から導き出さねばならないであろう。これまでの先輩たちの、そして現在も日々営まれているすぐれた授業・学習に学び、そこに存在する実践知・経験知をくみとり、集積・体系化して共有知として新しい（実践）理論を構築していく必要があるのである。

以上述べてきたことは、いずれもことばの教育について「根元的」「発生的」に考えようとするものである。次の1時間の授業にすぐ役立つものではない。しかし、すぐ役立つという名のもとに安直な「いかに」が求められすぎてはいないか。本当に意味を持つ「いかに」は、いま一度、ことばの教育とはなにかについて、「なぜ」ことばの教育が必要なのかという根本を問うことが、肝要ではないか。教育を取り巻く環境のきびしさが日々増している今だからこそ、皆が、考えてみる必要はないかと思い、提言申し上げた。

注1 大江健三郎・隅谷三喜男『私たちはいまどこにいるのか—主体性の再建—』（岩波ブックレット113）一九八八

注2 汐見稔幸「ことばの教育」（稲垣忠彦ほか編『教育の原理Ⅱ教師の仕事』東京大学出版会 一九八五

編集部注 初出

『月刊国語教育研究』.23(195);1988年8月号日本国語教育学会 編